

祭りにおける「イベント」の形成に関する基礎研究

—諏訪大社下社御柱祭「木落とし」の事例から—

石川俊介

はじめに

これまでの民俗学において、祭り・祭礼は、その土地の「民俗」や「文化」が顕著に現れるものとされ、その調査・研究がさかんに行われてきた。そのため、日本各地で行われている年中行事を中心とした、「伝統的」な祭り・祭礼に関する研究には膨大な蓄積がある。

さて、現在の民俗学・文化人類学・社会学などの分野においては、非宗教的なイベント¹を対象とした研究が、都市研究と接合するなどして、豊かな展開を見せている。それらの研究の対象は、①「よさこい系」など、地域的な枠組みを超えて日本各地で受容されているもの、②宗教的な意味合いが薄れる中でイベント化した「伝統的」な祭り・祭礼、③産業祭りや市民イベントなど、行政やメディアによって創造されてものに大きく分類できる。本稿が対象とする、諏訪大社御柱祭（以下、御柱祭）についての研究は、これらの研究から大きな示唆を得ている²。

後述するように、御柱祭では近代以降において、諏訪大社主導の祭事という性格が薄れてきた。このような経過と呼応するとは断言できないが、いわゆる非宗教的な、「イベント」³が生成されてきた。

1. 本稿の目的

本研究は、先行研究によって得た知見により、「伝統的」な祭りの中にイベント的なものが生成されたことに注目する。その事例として本稿では、御柱祭における下社木落としというものを取り上げる。

まず、下社木落しがどのようにはじまり、現在のような「イベント」として注目され、御柱祭のなかで中心性を得ていったかを、「外部」の立場にある文献・新聞等から確認する。特に、木落しが始まったとされる明治から、「イベント」として定着した戦後直後までの資料を検討する。

その上で、現在の下社木落しに関わる祭礼組織内における、「先頭乗り」（詳しくは後述）という名誉役の決定をめぐる語りから、下社木落しを取り巻く現状について論じる。

2. 御柱祭に関する研究状況

長野県諏訪地方で行われる御柱祭は、全国的によく知られた祭礼である。現在、テレビなどのメディアで御柱祭の「見せ場」として注目されているのは、下社山出し祭で行われる「木落し」である。この下社木落しは、御柱祭の代名詞と言える「イベント」であるにも関わらず、市町村史・その他文献においても、その内容が記述されているだけで、その歴史についてはほとんど論じられていない。

よって、本稿では、新聞や御柱祭に関する冊子などを資料として用い、下社木落しの歴史を見る一端として、新聞等の「外部」から下社木落しが注目されていく過程を確認する。

また、下社木落しは、膨大な研究蓄積がある御柱祭の意味や構造についての研究⁴においても、言及されることはなかった。その理由は、乱暴に言えば、木落しが御柱祭の儀礼的な面とは無関係の「イベント」であることである。

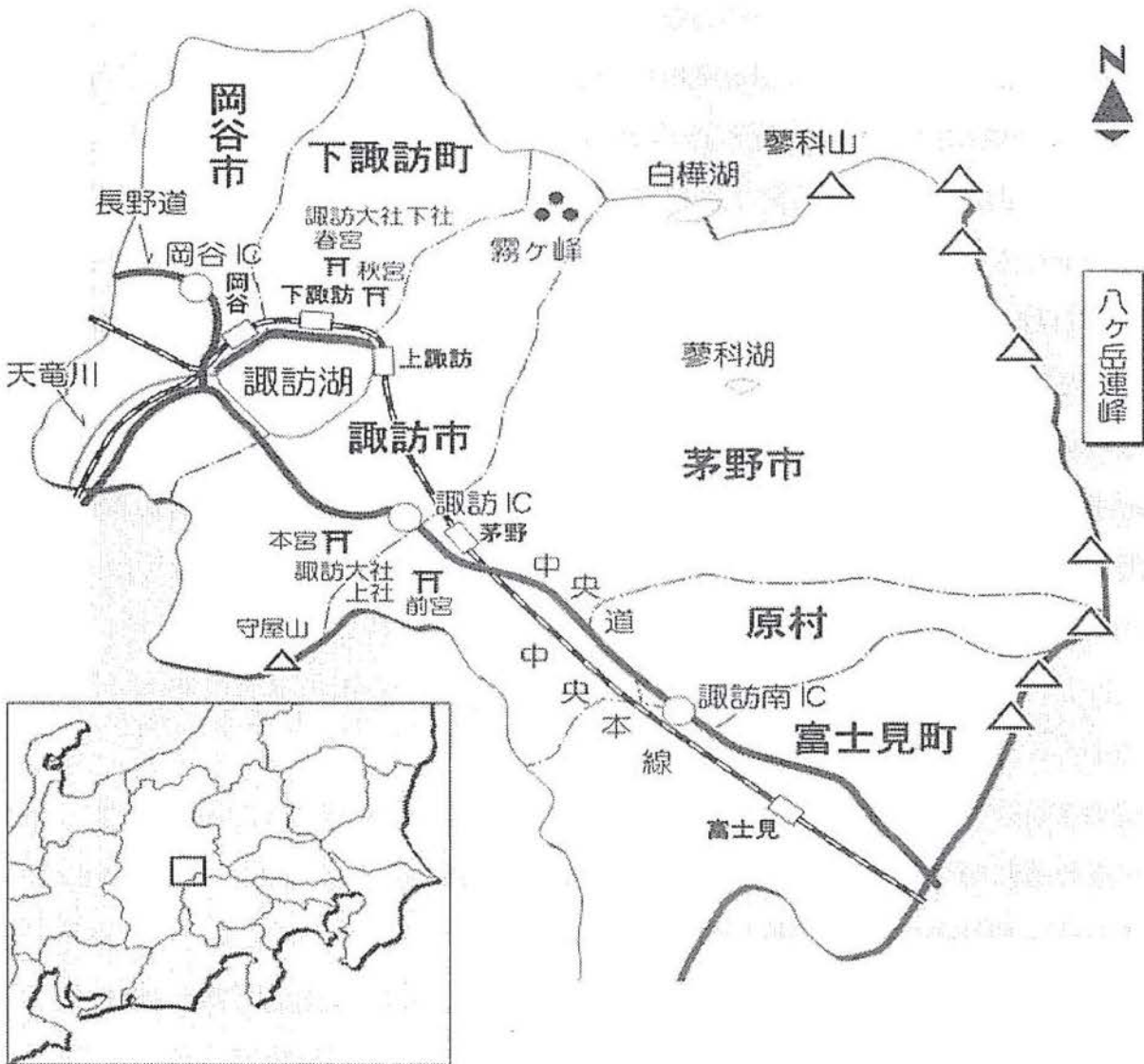
よって、木落しを儀礼構造論なアプローチで読み解こうとする方向に、本研究は向かわない。木落しが「儀礼的」行事であり、聖性や神事性を生み出している状況は指摘できるが、諏訪大社式年祭の行事の一端ではないことは確かである。木落しの聖性や神事性は、「よさこい系」などに見られる様に、参加者の創意工夫によって創られたものであると言える。よって、木落しに対しては、このような非宗教的イベントを考察するためのアプローチを用いることを提起したい。

本研究は、以上のような視点によって為されるものであるが、本稿ではまず基礎研究として、下社木落しの注目されていく過程と現状を記述するに留めたい。

3. 概要

長野県諏訪地方は長野県中部に位置し、山梨県と隣接している。諏訪地方は、諏訪湖周辺と八ヶ岳・蓼科山麓などの周辺部から成っている。諏訪地方6市町村の人口は約20万人であり、主要産業は精密機械工業、観光業である。

資料1 諏訪地方の地図



(信濃毎日新聞社編集局, 2003 p.2)

全国の諏訪神社の中心である諏訪大社上社・下社は、4つの宮から成っており、諏訪市に上社本宮、茅野市に上社前宮、諏訪郡下諏訪町に下社春宮・秋宮がある。

御柱祭は、寅と申の年に行われる。御柱祭は、簡潔に説明するなら、上社・下社それぞれの奥山（御柱山）から、樅の大木を伐り出し、車輪などは一切使わず人力によって曳行し、社殿の四隅に曳き建てる祭りである。上社本宮・前宮の境内に各4本ずつ、下社春宮・秋宮の境内に各4本ずつ、計16本の御柱を建てる。御柱祭にあたり、諏訪地方は上社・下社担当地区に分かれ、その地区内でさらに8つの御柱担当地区に分かれる。それぞれの地区が1本の御柱を担当するのである。御柱は、大きいもので重さ10トン以上、長さ16～7メートルあり、一本につき2,000～5,000人の人々によって曳行される。

御柱祭は、4月および5月初旬の土曜・日曜・祝日を中心に行われる⁵。4月はじめに、奥山から市街地近くの中継地まで御柱を曳行する「山出し祭」、5月はじめに市街地を曳行し各宮に御柱を曳き立てる「里曳き祭」が行われる。現在、上社・下社ともに山出し祭3日間、里曳き祭3日間の日程で行われている。休日・祭日に日程は変更されたが、現在でも小中高校の始業式が御柱祭の日程に合わせてずらされたりするなど、諏訪地方の住民生活に浸透した祭りとして続いている。

近年の御柱祭は、上社・下社ともに「木落とし」・「川越し（上社のみ）」といった行事が全国的に注目され、多くの観光客を集めている⁶。しかし、これらは式年造宮祭である御柱祭本来の行事ではない。

4. 下社山出し祭と木落としの概要～平成16年（2004）の参与観察から

続いて、下社山出し祭と木落としについて、筆者が平成16年（2004）に行った参与観察を基に紹介する。下社御柱祭は、先述したように山出し祭と里曳き祭によって成るが、里曳き祭⁷の詳細は省略する。

上社から遅れること1週間、4月第2週の週末から下社山出し祭が始まる。下社御柱祭に奉仕するのは、諏訪の西半分の氏子である。市町村では、岡谷市、下諏訪町、諏訪市（上諏訪）である。

下諏訪町の東俣国有林で見立て⁸を終え、伐採された御柱は、「棚木場」と呼ばれる広場に安置されている。まず、曳行に先立ち、神事が行われる。

数千人の氏子によって棚子場から曳き出された御柱は、舗装されているとはい

え、幅の狭い道を下っていく。曳行路の道幅は、下諏訪町萩倉の集落に入るまで、自動車のすれ違いもむずかしく、上社の半分ほどしかない。

萩倉の集落を抜ければ、木落とし坂は目の前である。木落とし坂の上には、樹齢200年と言われる通称「木落とし松」や、「諏訪大社下社御柱街道 天下の木落とし坂」と書かれた石碑（平成以降に建造）がある。

木落とし坂に到着すると、前方の曳き綱に就く曳き子は、綱を持ったまま木落とし坂を下り、坂の両側に別れて御柱が顔を出す時を待つ。前方の曳き綱は左右に広げられ、木落としの落ちるスペースが確保される。後方では、御柱の後部の追掛け綱を、曳行路にある追掛け綱を固定する柱につなぐれ、しっかりと張られる。

木落としの準備の間、木落としを盛り上げる演出が行なわれる。木遣りやラッパの他、垂れ幕を垂らしたり、くす球を割ったりする。各御柱担当地区は、趣向を凝らしたパフォーマンスを行なう。また、坂に塩が撒かれることもある。いよいよ御柱の準備が整うと、木落とし乗りたちが柱に乗っていく。

準備が一通り終わると、合図を受けた斧（よき）長が斧で追掛け綱を切る。御柱の後部は徐々に浮き上がり、御柱は坂に吸い込まれるように落ちていく。

轟音を響かせる御柱のスピードは、坂中央の盛り上がった部分で一度緩められる。その反動で、跨った男たちの大半は御柱から振り落とされる。この時、周囲で見ていた氏子も含め、群集が御柱の先頭を求めて殺到する。その中には、明らかに先頭を奪いに来る者もいる。それに対して、担当地区の氏子衆は、先頭の位置を必死で守ろうとする。その一方、御柱に跨って降り下ろうとする者たちも現れる。このようななか、御柱は土を削りながら再び動き出す。周囲の乗り手達は次々と振り落とされ、坂の下まで滑り落ちる。

木落としの最中、木落とし坂周辺は、坂の下を流れる砥川の河川敷から、下の国道142号線まで見物客と氏子でごった返す。ふもとから登ってきた人々の中には、木落とし坂を見ることもできなかつた人も多かつた。下社山出し祭初日の4月9日、春宮三の御柱に同行していた筆者も、木落とし坂の下に下りることができず、上から落ちていく御柱の後部を見ていた。

一方、木落とし坂下の砥川河川敷は整備され、平成16年（2004）より有料観覧席となった。この観覧席は、数倍の値段で取り引きされるなど、大きな反響を呼ん

だ。前売り券の発売には、徹夜組も含め1,000人以上が列を作った。山出し祭当日も、多くの見物客が明け方から列を作った。

坂の下で御柱が安定すると、万歳三唱で木落しの成功、皆の無事を祝う。木落しを終えた御柱は、下社山出し祭の終着地である注連掛⁹を目指し、曳行を再開する。約1時間で注連掛に到着し、曳行長や市長・町長からの労いのあいさつが行われ、万歳三唱で山出し祭は終了する。

5. 下社木落しの変遷

ここで近代以降の御柱祭の変遷を論じながら、明治以降～戦後直後の新聞・文献等から、下社木落しが注目されていく状況を確認する（章末の資料を参照）。

5-1. 前曳きから山出し祭へ

本来御柱祭においては、里曳き祭が中心であり、山出し祭は「準備作業」という位置付けであった。筆者が管見した限り、下社では明治35年（1902）の新聞¹⁰において、山出しという言葉が見られるが、江戸時代までは、「前曳き」と呼ばれていたとされる（蟹江 2003 p.10）。

江戸時代、御柱の伐採から注連掛までの曳行は、下社の神領に住む「杣人」が、下社より依頼を受け行っていたという（蟹江 2003、第一区区誌編さん委員会編 1985）。つまり、諏訪大社¹¹に雇われた人足が、現在の山出し祭に相当する部分を担っていたとされる（蟹江 2003）。

しかし、明治に入ると、廃藩置県によりそれまで諏訪大社の経済的な後ろ盾であった、高島藩（諏訪藩）がなくなったため、諏訪大社は祭りの存続のため、自主的な動きが必要となった（蟹江 2003 pp.13-14）。

明治11年（1878）に行われた諏訪郡の各町村首長の協議以降、御柱祭の度に、人足への賃金や曳行人員数の制限は段階的に廃止されていく。御柱祭は、高島藩と諏訪大社の祭事から、諏訪郡首長が主導し、その費用は担当地区の負担による「諏訪民衆の祭り」に変わっていったと言える¹²。

御柱の伐採についても、下社では大正2年（1913）以後、地区がそれぞれ御柱

を担当することが慣例になった（第一区区誌編さん委員会編 1985 p.598）。また、伐採地（棚木場）～注連掛の曳行も各地区の氏子の担当となった¹³。上社では、明治初期から御柱の曳行競争がさかんに行われたとの記録が残っているが、下社では山出し（前曳き）の日程が町村によって別であった上、曳行路がせまく危険であったため、このような状況は生まれなかったと考えられる。

5-2. 木落としのはじまり

下社木落としのはじまりは、江戸時代の御柱祭関連資料より、明治5年（1872）以降と推定される（蟹江 2003、第一区区誌編さん委員会編 1985）¹⁴。江戸時代、上社に対し、下社の御柱祭では、御柱を調達する山が固定しなかった¹⁵。下社の江戸時代用材の調達は、現在の木落とし坂とは離れた砥川上流の戸沢（砥沢）や樋橋¹⁶、またはさらに西部の塩尻峠方面の赤渋など、険しい山々で行なわれていた。また、下社秋宮の背後に広がる御射山からも調達したこともあるという。

よって、江戸時代で東俣からの用材調達は、安政元年（1854）のみであり（蟹江 2003 p.10）、東俣からの用材調達が行われたのは、明治5年（1872）の維新後初の御柱祭からであった。その後、祭りの度にどこで伐採するか話し合いが行なわれたが、明治28年（1895）以降東俣での伐採が固定化し、この慣例が今も続いている（前掲 pp.15-16）。つまり、下社の御柱が木落とし坂を通過するようになったのは、明治以降であると言える（前掲 p.13）。

筆者が管見した限りにおいて、下社山出し祭¹⁷が新聞で伝えられている最初の記事は、先に述べた通り、明治35年のものである。また、明治41年（1908）の新聞記事では、木落としの名称が用いられている。しかし、具体的な記述は見られず、その様子はわからない¹⁸。

5-3. 木落とし乗りの登場

大正3年（1914）、下社木落としに、御柱に乗って坂を下ろうとする若者が現れたとされる。秋宮一の曳行に参加していた下諏訪町の中村知也氏（当時21才）である（長野県教育委員会 1972 pp.320-321、宮坂精通他 2003 pp.158-159）。しかし、この出来事についての新聞記事を見つけ出すことはできなかった¹⁹。

その後、中村氏は5回連続で木落とし乗りとなり、「伝説のおんばしら男（宮坂精通他 2003 p.158）」として今も語り継がれている。発表者が下諏訪町で2004年～2005年に行った聞き取り調査でも、中村氏が話題にのぼることが多かった。

大正9年（1920）の新聞には、木落としの写真が掲載されており（章末写真参照）、人が乗ったという記述はないが、見物人が数万人集まったことと書かれている²⁰。この御柱がどの地区のものであるか判別できないが、だれも乗っていないことから、秋宮一以外の木落とし乗りがすぐには登場しなかったと推測できる。

しかし、その後の記事を見ると、中村氏が乗った秋宮一だけであった木落とし乗りが、他の御柱にも広がっていったことがわかる。大正15年（昭和元年、1926）の新聞記事では、木落とし乗りが御柱に乗り下る光景が記述され、振り落とされた様子や乗り手の名前が紹介されている。この記事では、木落とし坂が確かに認識されており、上社の木落としと対比されている。

以上から、木落としが新聞に取り上げられるものとなったことがわかる。つまり、木落としが「イベント」となる萌芽が見られること、それと共に明治時代に比べて、下社山出し祭の注目度が高まってきていたことが指摘できる²¹。

5-4. 「イベント」化する木落とし

昭和7年（1932）の御柱祭となると、下社木落としの記事が紙面を賑わすようになる。これは、下社木落としに対する注目度が、明らかに高まっていることを示している。また、木落とし乗りに対する新聞の扱いはそれまでに比べて大きく、大正時代に比べて、多くの地区の御柱について報道されるようになった。また、氏名を伝えている記事も見られる。

昭和13年（1938）となると、上社・下社ともに山出し祭は、その日程から詳しい様子まで報道されている。木落としの記事では、見物人を意識したパフォーマンスについてのものもある。しかし、この時点においても、木落とし乗りが全ての地区で見られたわけではないようである。

また、この年に書かれた諏訪信仰に関する冊子には、下社の木落としを写真付きで、「実に雄大壯観で無慮万余の見物、あるいは奇快に拍手し、あるいは妙絶に喝采する（宮坂喜十・今井広亀編 1979 p.120）」と紹介している。しかし、下社

木落しが新聞報道において、必ず取り上げられているわけではない。

昭和19年（1944）は、曳行中に下諏訪町町長が亡くなるという事態により、下社の木落しは行われなかったとされる。また、戦時中ということで男手もなく、余興も差し控えられたという。

昭和25年（1950）は、初の木落し乗りであった中村知也氏の子である、中村琳氏（当時24才）が木落し乗りを務めるなど、この時点で木落し乗りの「第二世代」が台頭していたという（長野県教育委員会 1972 p.321、宮坂精通他 2003 pp.158-159）。また、何度も木落し乗りを経験した人物も見られる。さらに、新聞に名前が挙げられるだけでなく、先頭に乗ることが意識化されていることがうかがえる。

昭和27年（1952）に出された御柱祭を紹介する冊子には、下社の山出し祭について「川越えはないが木落しは非常な壮観で、御柱は三十余間の崖上から急転直下、一気に滑り落ち、一二の剛の者はその御柱に乗り下って観衆の膽をひやさせる（諏訪大社奉祀會編 1952 p.22）」と書かれている。

また、昭和38年（1963）に諏訪大社が、御柱祭を紹介したものでは、下社の「木落し」について「これまさに下社御柱祭中第一の豪壮なる景観（諏訪大社編 1963 p.80）」としている。

以上の文献から明らかなように、下社の木落しは御柱祭の「目玉」や「見せ場」として、その壮観さや凄まじさが紹介されていることがわかる。

5-5. 「伝統化」する木落し乗り

先に少し触れたように時代が下るにつれて、木落し乗りの中には何回も乗り下った「御柱男」が現れる。「下諏訪町には昔から木落しを乗り下った荒武者がたくさんある（中略）木落しをけがし汚名を後世に残さぬよう、身をもって後継者の指導にあたり、『木落し乗り』の伝統を末代まで保持して行こうと専念（長野県教育委員会 1972 p.321）」とあるように、木落し乗りが木落しの象徴として語られている。

また、下社木落しが「イベント」として認識されるようになってから、木落し乗りは限られた人々しかなることができなかつたようである。実際のところどう

であったか疑問ではあるが、木落しは「親子、兄弟、先輩後輩と受け継がれてきた数々の御柱乗りの伝統（宮坂精通他 2003 p.159）」というように、一部の限られた人々に独占されてきた役柄であったようである。

「先駆者」である中村家では、琳氏のおいにあたる政道氏が昭和55年（1980）と昭和61年（1986）に木落し乗りを務めている。発表者が当時を知る人に行った聞き取りによると、本人は乗る気ではなかったのに、「中村家の人間なら乗れ」ということで乗ることになったそうである²²。

5-6. 下社木落しの変遷のまとめ

ここまでから、以下のように下社木落しについて整理できる。①下社木落しは、蟹江が指摘しているように、明治以前には行われていなかった（蟹江 2003 p.13）。②明治以降、木落しが行われるようになり、落ちる御柱に人が乗るといふ行為がはじまったことで、木落しがひとつの「イベント」として認識され始めた。

ここまでで、下社木落しが「外部」の立場である新聞などから注目されるようになった過程を確認した。また、御柱祭の関係者が、「外部」に御柱祭を紹介する時にも、下社木落しを取り上げられていることがわかった。

資料2 御柱祭関係年表

	諏訪大社関係	御柱祭関係	下社関係
明治4年(1871)	上社・下社が合併し、国幣中社諏訪神社となる		
明治5年(1872)		筑摩県高島出張所の命令で曳き人足が旧慣により差し出される	御用材を東俣で伐採（これ以前は伐採地が固定せず）
明治11年(1878)		諏訪郡24カ村村長会議で、従来の御柱祭を基本として協議事項を決定	

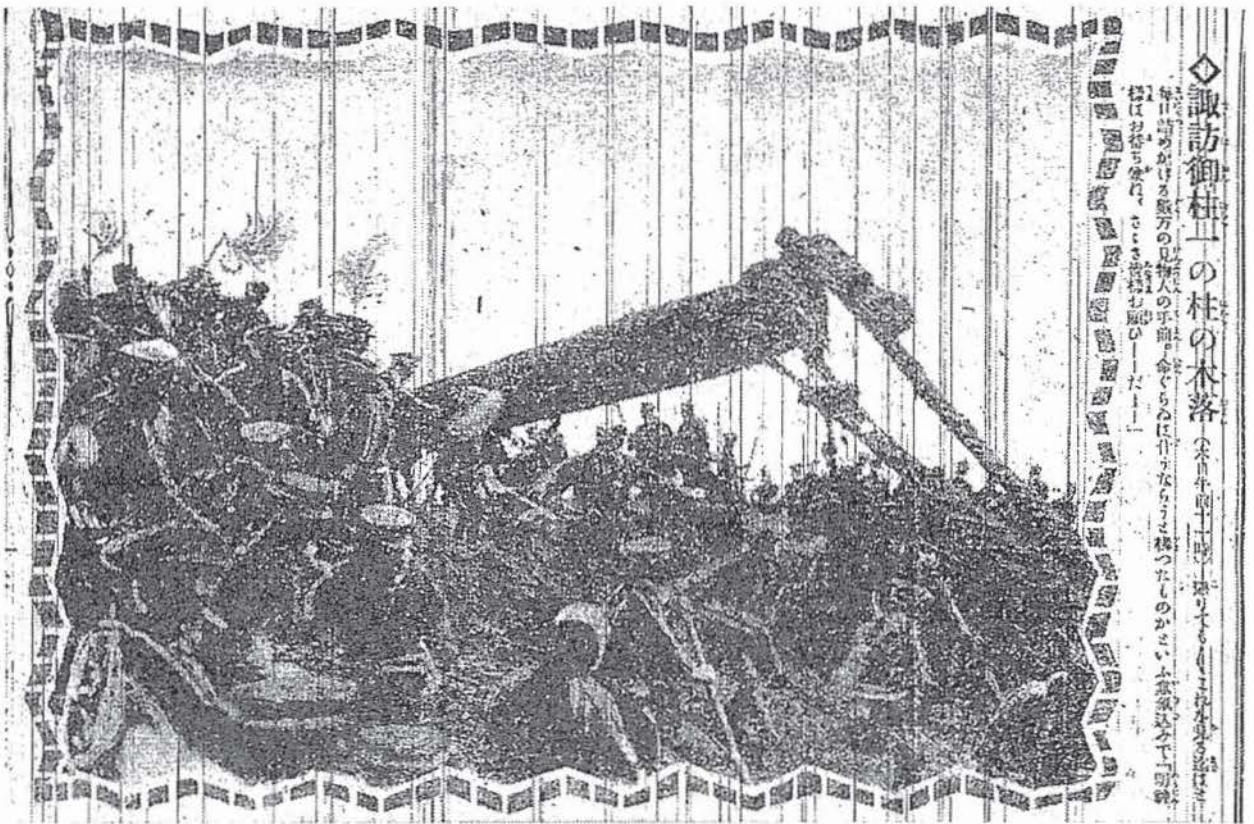
明治17年(1884)		豊田・四賀地区（現諏訪市）が上社の所属となる	
明治23年(1890)		上社下社の御柱曳行分担の抽籤を開始 奉仕人員の増員を決定	
明治28年(1895)		曳き人足への賃金が廃止	御用材伐採地を東俣で固定すると決定 御柱抽籤の廃止を決定
明治35年(1902)		上社の御柱抽籤が現在の8ブロックに 上社山出し祭で死者2名を出す大喧嘩が発生	下社の曳行担当を固定（以後慣例化） 地元新聞に下社山出し祭の日程に関する記事
明治41年(1908)		前回の喧嘩を受けて、警察が本格介入 上社地区では不参加論議	地元新聞に木落しの記事
大正2年(1913)			各地区が御柱の伐採も担当すると決定
大正3年(1914)		皇太后殿下の様態悪化で自粛ムード	下諏訪町の中村知也氏が秋宮一の木落しで御柱に乗り下る
大正5年(1916)	官幣大社に昇格		
大正9年(1920)			地元新聞に木落しに数万人の見物人が集ったとの記事
大正15年(1926、昭和元年)		曳き人足数の制限を廃止、男性に限り参加自由に	山出しの曳行が棚木場から注連掛までに変更 地元新聞に木落し乗りの記事

昭和7年(1932)		各市町村の法被を新調	地元新聞にいくつかの地区の木落しの記事
昭和13年(1938)			地元新聞に木落し坂でのパフォーマンスの記事
昭和19年(1944)		人呼び・余興は自肅曳行人員の不足を補うため、尋常小学校生・女性の動員	下社山出し祭の事故で下諏訪町長が死亡 木落し乗りを自肅
昭和23年(1948)	宗教法人となり、諏訪大社と改称		
昭和25年(1950)		女性の参加を許可伐採地からの曳き出しが業者委託に	中村知也氏の息子琳氏が木落し乗り
昭和49年(1974)			NHKの放送に合わせての秋宮一木落し
昭和61年(1968)		国無形文化財指定調査が入るが指定されず	NHKが先頭乗りを目指す男たちを描いたテレビ番組を放送(2004年に再放送)

資料3 下社木落し関連新聞記事一覧

御柱開催年	新聞記事とその内容	出典・備考
明治35年(1902)	「諏訪御柱下社山出し」・・・担当地区別にいつ山出しを行うか書かれている	信濃毎日新聞明治35年4月9日
明治41年(1908)	「木落しを曳出して」・・・具体的には何も書かれていない	信濃毎日新聞明治41年4月23日
大正3年(1914)	なし	
大正9年(1920)	「 <u>諏訪御柱一の柱の木落</u> 」・・・人が乗ったことは書かれていないが、見物人が数万人とある	信濃毎日新聞大正9年4月8日一写真も掲載(人は乗っていない)

<p>大正15年（1926、昭和元年）</p>	<p>木落とし坂について「上社の如く急ではないが壮観は上社以上である」・・・人が乗り下る様子や乗った人の氏名が描写されている</p>	<p>南信日日新聞大正15年4月8日</p>
<p>昭和7年（1932）</p>	<p>「難所木落しに到着」 「命知らずの若者数名をのせた」 「豪快な木落しに歓呼あがる」</p>	<p>信濃毎日新聞昭和7年4月8日</p>
	<p>「見事な御柱乗りの勇者」</p>	<p>南信日日新聞昭和7年4月11日</p>
	<p>「秋宮三 長岡和吉、柳澤米右衛門兩勇士を乗せ落下、つづいて秋宮一 熊澤信太郎君外二勇士」</p>	<p>信濃毎日新聞昭和7年4月11日</p>
<p>昭和13年（1938）</p>	<p>木落とし乗りの写真を掲載</p>	<p>信濃毎日新聞昭和13年4月12日 －写真のみで説明なし</p>
	<p>「下社木落しの西側の土手で火をはなち炎々と燃えあがれば、『消防手集まれ！』とたちまち消止めて鎮火ラッパ。とんだ余興と見物人大よるこび」</p>	<p>信陽新聞昭和13年4月14日</p>
<p>昭和19年（1944）</p>	<p>なし</p>	<p>下諏訪町長が曳行中の事故で亡くなったため、木落とし乗りは中止</p>
<p>昭和25年（1950）</p>	<p>「木落としレギュラーの小口次男（高木）－先頭長岡和吉（富部） 長崎金平 大和惣吉」</p>	<p>南信日日新聞昭和25年4月12日 「先頭」という言葉が見られる</p>



大正9年（1920）下社木落し（信濃毎日新聞大正9年4月8日第2面）

6. 下社木落しを取り巻く現状

6-1. 「先頭乗り」とは

現在、御柱の先端に乗り、下社木落しを乗り下る役を、先頭乗り・華・華乗りなどと呼び、「諏訪男最大の名誉役」と語られる。この役については、予め話し合いやくじなどで決定する地区がほとんどであり、多くの希望者が名乗りを上げる。

では、この先頭乗りの決定をめぐる氏子組織の現状について、筆者が行った聞き取りを基に明らかにしたい。

下社某地区の氏子組織幹部Fさん²³の話（2005年9月11日聞き取り）

平成16年（2004）御柱祭にあたり、Fさんは所属する氏子組織での「先頭乗り」の決定をめぐる、以下のように語っている。

「それまでは一部の会があったが、ヤクザとまではいかないがそれなりに怖い人たちの会。その会が幅を利かせていた」

「(御柱祭の) 当日だけ来て役をとる」

「華は皆その会から」

このような現状を変えたいと思ったFさんたち数人は、御柱年の前々年（2002年）に氏子組織の改革のため仲間を募り、新たな「氏子会」を結成し、徐々に会員を増やしていった。その中で「一部の会」の人たちも説得し、理解してもらったという。Fさんは、新たな氏子会を結成した理由として、以下のように語っている。

「誰もが楽しめる祭りにする」

「祭りというのはその前の準備が大切だし、大変」

「当日来ただけで柱に乗れるということのないようにしたかった」

その氏子会の副会長となったFさんは、御柱祭前年（2003年）の年末、「先頭乗り」に選ばれた。Fさんはその時から、御柱祭まで、そしてその後のことについて、以下のように語った。

「やりたいと言ってあり、氏子会と「前の会」から認めてもらった。決まったのは前年末。」

「決まっても当日まで半信半疑だった。氏子会は大丈夫だと思ったけど「前の会」がなあ」

「華になったあと文句は聞かなかった。自分では満足。」

Fさんが先頭乗り（華）となることについて強調している点は、地区への「貢献度」である。それは以下の語りからも明らかである。

「ただ当日来て乗るだけじゃだめだ。準備にも参加し、御柱の歴史とか技術とか

を習得しておかないと」

「元綱²⁴やいろんな人のおかげで柱が動く」

「大社では華をやったけど、地区ではカサ踊り（花笠踊り：発表者注）をしている。諏訪は、大社に地区の神社に町の神社とあるから、全てに関わっていかないと「あいつは乗ってばかりで地区では何もしない」と言われる」

「もちろん氏子会以外の人もある。氏子会に入らなきゃいけないわけではない。だけど氏子会は祭り前から奉仕しているし、技術をもっている。準備に携わらずに当日来て乗せてくれというのでは前と変わらない」

6-2. 下社木落しを取り巻く現状のまとめ

Fさんの語りから明らかなように、木落としし乗りとなること、特に先頭乗り（華、華乗り）となることが、名誉なことと考えられていることがわかる。また、話し合いで先頭乗りを決定している様子が見られることから、認められればだれでも乗れるようになったことがうかがえる。しかし、その一方で、木落とし乗りを独占しようとする事への反発があること、木落としにしか興味を示さないことへの反発があることがわかる。

7. 総括

下社木落しは、文献・新聞資料で見ると、時代が下るにつれて「外部」である新聞などから注目されてきたことが確認できた。その理由として、落ちる御柱に乗ることが、見物人から「見せ物」として人気を呼んだだけでなく、本来御柱祭にあったイメージである「男の祭」などの価値観²⁵と結び付いていったことが考えられる。

現在、下社木落しにおいて、「先頭乗り」はその象徴であり、御柱祭に携わる人々を惹きつけるものとして、機能していると言える。その理由は、木落とし乗りがもつ名誉である。しかし、御柱の曳行に携わる担当地区内では、あまりに木落としに注目が集まる中で、個人的な名誉欲に走る者への反発が見られる。また、曳行やその他の行事が軽視されることに対して、問題視する意見も見られる。

8. 考察と今後の展望

本稿では、まず、新聞などの「外部」によって注目されていく過程から、下社木落しが御柱祭の代名詞として認識されるようになったことを確認した。次に、氏子組織関係者からの聞き取りより、現在の御柱担当地区内での「先頭乗り」をめぐる葛藤があることがわかった。このような葛藤は、御柱祭の実施者である「内部」の人々も、下社木落しが御柱祭の中で、中心性を占めるものであると考えていることを示している。

下社木落しとは、本来なかったものであり、必ず行わなければならないものでもない。御柱祭の目的である、御柱の曳行・建て替えとも無関係の「イベント」であると言える。しかし、この木落しに多くの人々が惹きつけられていることは明らかであり、現在の御柱祭の動態を見る上で、看過できないものである。

下社木落しは、「伝統的」な祭りのなかに生成した「イベント」である。このような「イベント」は、近代的な要素や借り物的な余興などを取捨選択し、さらには、既存の祭りの聖性や儀礼性を取り入れるなど、その創造過程が多様であることが考えられる。確かに、「伝統的」な祭りのなかに生まれたものであることから、祝祭性のみを追及した非宗教的なイベントとは区別されるべきである。しかし、その生成を考察するに当たっては、非宗教的イベントに関する研究から得られるものは多い。今後は、このような視点から、下社木落しについて、さらなる調査・研究が必要であると思われるが、本稿ではそれを論じる余力がない。

1 本稿では、中野の説明に従ってイベントを「宗教とのかかわりを持たないマツリ（中野 2006 p.219）」とするが、本稿が対象とする「伝統」的・宗教的祭りのなかの非宗教的行事のことを指す語として、便宜上用いる。

2 中野の一連の研究（中野 2007など）、福間の北海道での博多山笠の「受容」の研究（福間 2004）など。地域共同体による宗教的な祭りが、場所・空間・担い手を超えて展開するという指摘は、本研究にとって特に示唆的である。

3 本稿では、検討の余地はあるが、便宜上、「伝統的」な祭りの中に近代以降形成され

た、本来の祭りとの宗教的なつながりが希薄な行事を「イベント」という言葉で表すこととする。

- 4 柳田・折口は共に、御柱とは、祭り時に立てられる幟と同様に、祭りを行うための空間を作る機能をもったものであると述べている（柳田1990、折口1999）。また、御柱は陰陽道との関係から説明されるなど諸説あるが、結界を意味するものと考えられている。社の四方を守る御柱の建て替えは、宗教的秩序の更新であると共に、共同体の秩序の更新でもあると言われる（大林 1987）。
- 5 昭和25年（1950）までは、山出し祭は、寅年には上社が4月初めの寅の日に、下社は7日後の寅の日から始められた。「里曳き祭」は、上社が5月初めの寅の日から、下社がその7日後の寅の日から始められていた。また、申年には上社が申の日、下社が寅の日から始められるのを慣例としていた（倉林編 1983 p.100）。
- 6 平成16年（2004）の観光客は、約178万人（上社・下社合計：12日間）であった。
- 7 里曳き祭は、山出し祭から1ヵ月後の5月初旬に行われる。御柱を安置してあった注連掛から春宮と秋宮に御柱を曳行し、御柱を立ち上げる「建て御柱」を行う。市街地を曳行する里曳き祭では、様々な芸能も見られ、江戸時代から続く都市祭礼の姿を見ることができる。
- 8 御柱となる樅の木を選定する行事。
- 9 国道142号線沿いの小高い丘の上にある広場。御柱はここに約1ヵ月間安置され、里曳き祭を待つ。
- 10 上社については、明治23年に山出しの言葉が見られる（信濃毎日新聞明治23年4月12日第2面、4月16日第3面）
- 11 諏訪大社の名称は、戦後の宗教法人化によって定められたものであり、それ以前は官幣大社諏訪神社であった。本稿では便宜上諏訪大社で統一する。
- 12 下諏訪町第一区の御柱祭のための予算は、平年の区予算に匹敵し、その大部分は寄付金であるという（第一区区誌編さん委員会編 1985 p.600）また、女性の参加が許可されたのは、戦後第1回の昭和25年（1950）御柱祭からであった。
- 13 大正15年（1926、昭和元年）より、現在のスタイル（柵木場～注連掛）になったという（蟹江 2003 p.18）
- 14 蟹江（蟹江 2003）は、宝永7年（1710）に書かれた『御柱の嘉例帳』と、嘉永6年（1853）に下社桃井称宣太夫保高によって書かれた『御柱前年より御柱年万端留』の2つの文書を用いて、江戸時代の下社御柱祭の変遷を論じている。
- 15 この理由について、蟹江は、下社と諏訪を治めていた高島藩との関係から論じている。詳しくは（蟹江 2003）を参照。
- 16 砥川は、諏訪湖に注ぐ河川。戸沢（砥沢）・樋橋は、木落し坂より上流の西側の地域である。木落し坂は、砥川に面した東側の段丘にある。

- 17 上社山出し祭に比べて、下社山出し祭（前曳き）についての新聞記事は圧倒的に少ない。上社が明治時代から、その様子について具体的に書かれていることと対照的である。この理由については、本稿では明確に説明することができないが、下社が藩主との関わりの深い上社に比べて、劣位に置かれていたこと。下社の山出しが上社のそれに比べて、曳き出し作業と言う性格が強く、報道の対象とされなかったことなどが理由として考えられる。
- 18 同時期には、上社山出し祭の木落しが新聞で大きく報道されている。
- 19 大正3年（1914）当時、明治天皇の後である皇太后殿下が重病を患っていて、全国的に祭りを自粛しようという雰囲気が出た。4月半ばに皇太后殿下が逝去されると、追悼のため、中止される祭りが続出した。御柱祭も例外ではなく、里曳き祭の中止・延期が議論された。最終的には、日程は変えず、余興を全て中止することで行われたという（信濃毎日新聞朝刊 大正3年4月20日（第2面））。
- 20 この時期に書かれた御柱祭を紹介する冊子には、上社の「木落し」の説明があるが、下社のそれを見ることができない。上社については「木落シト云フ小坂路ヲ曳キ下シ」（飯田 1916 p.45）と紹介されている。
- 21 その背景として、先述したように御柱祭への参加が自由化されていったこと。下社側である現在の岡谷市・下諏訪町が製糸工業の発展により、経済的に大きく発展したことが挙げられる。
- 22 秋宮一の御柱は、「平成になると、御柱（秋一）はだれでも乗れるようになった（宮坂精通他 2003 p.159）」という。
- 23 下社地区の某氏子組織の幹部。41歳（2005年の聞き取り時）。父親が無類の御柱好きであったことから、御柱には若い頃から熱心に参加。平成16年（2004）御柱祭で木落しの先頭に乗る役である、「華」を担当。また、平成10年（1998）の建て御柱でも「華（先端乗り）」を務めた。
- 24 御柱曳行で前に張られた2本の綱（男綱・女綱）を曳く役。
- 25 上社山出し祭においては、御柱祭での喧嘩を伝える記事が多く見られる。「古來山出しといへば平生遺恨を挟む村々の間に喧嘩口論必らず多少の死傷者を生ずる（信濃毎日新聞明治23年4月12日 第2面）」とあるように、御柱祭の総体的なイメージとして、「喧嘩祭」という言説があったことがわかる。このような御柱祭のイメージやその価値観は様々に変容してきた。この点については、昭和61年（1986）の国無形民俗文化財指定調査に関する言説を論じた、島田の研究（島田 2007）が示唆的である。

引用・参考文献

飯田好太郎編、1916『官幣中社 諏訪神社資料 下巻』

- 大林太良, 1987「聖空間の構成原理－文化人類学の視点から」『御柱祭と諏訪大社』 上田正昭他 筑摩書房 pp.67-121
- 折口信夫, 1999「御柱の話」『折口信夫全集』 別巻1 折口信夫全集刊行会編 pp.456-471
- 蟹江文吉, 2003『講演集 第四輯 「諏訪大社下社の御柱の変遷」』平成十五年七月七日 第四回 全国諏訪神社連合長野県支部総会
- 倉林正次編, 1983『日本 まつりと年中行事事典』 桜風社
- 信濃毎日新聞社編集局, 2003『諏訪 人と風土』信濃毎日新聞社
- 島田潔, 1988「諏訪御柱祭－空間的象徴性について－」國學院雑誌第89巻第5号 pp.25-41
- , 2007「近年の御柱祭に見る不変と可変－社会意識と祭りの動態－」『諏訪系神社の御柱祭－式年祭の歴史民俗学的研究－』松崎憲三編 岩田書院pp.37-75
- 市民新聞グループ, 1998『平成10年諏訪大社式年造宮御柱大祭 特集「おんぼしら」総集編』 市民新聞
- 下諏訪町第一区誌編さん委員会, 1985『郷土誌 下の原』 下諏訪町第一区
- 諏訪大社編, 1963『諏訪大社復興記』諏訪大社
- 諏訪大社奉祀會編, 1952『諏訪大社の話』 甲陽書房
- 中野紀和, 2006「トピックス (イベントの民俗) －「移動」から捉えたイベントと祭礼のイベント化－」『日本民俗学』247 pp.219-240
- , 2007『小倉祇園の太鼓の都市人類学－記憶・場所・身体』古今書院
- 長野県教育委員会, 1972『諏訪信仰習俗 長野県民俗資料調査報告12』正文社
- 福間裕爾, 2004『『ウツス』ということ－北海道芦別建夏山笠の博多山笠受容の過程』『国立歴史民俗博物館研究報告』114 pp.155-226
- 宮坂喜十著・今井広亀編, 1979『諏訪大神の信仰』下諏訪町博物館
- 宮坂精通他, 2003『おんぼしら 諏訪大社御柱祭のすべて』信州・市民新聞グループ
- 宮坂光昭, 1992『諏訪大社の御柱と年中行事』郷土出版社
- 柳田國男, 1990「日本の祭り」『柳田國男全集』13 ちくま文庫 pp.211-430

映像資料

- LCV制作会社／LCVネットワーク株式会社制作・著作, 2004『御柱祭 上社編・下社編－平成16年諏訪大社式年造宮御柱大祭』(LCVD-200407)

(いしかわ しゅんすけ／比較人文学)